

# 「西南学院学徒出陣戦没者 追悼記念式」を終えて

伊原 幹治

2013年6月1日(土) 14:00から、「西南学院学徒出陣戦没者追悼記念式」が大学博物館(ドージャー記念館) 2階の礼拝堂で行われた。

この件に関しては、昨年度の『西南学院史紀要』(2013.5 VOL.8)に、「『西南学院と戦争』の検証」と題して、「学徒出陣戦没者追悼記念式」が開催されるに至った経過までを述べておいた。ただ前号は5月15日の創立記念日の発行であるため、追悼式の内容まで盛り込むことができなかつたので、今回その後の部分を報告することになるが、改めてここに至るまでの経過を簡単に説明しておく。

2010年5月に大学ラグビー部OBの坂本譲氏より、学徒出陣戦没者の追悼式を行ってほしいとの申し出が学院になされた。これを受けて、常任理事会では2011年10月「西南学院と戦争」検討委員会(松見俊委員長)を設置し、翌2012年3月に同委員会より答申を得た。これに対して、4月に就任したパークレー新院長からは自身が米国籍であるので、主催者側として追悼式に出ることは適当でないとの意見が示された。小委員会で検討の結果、学院の戦争責任の問題に関しては、この問題に踏み込むには検討するための時間が十分でなく先送りせざるを得ないが、追悼式の実施をこれ以上引き延ばすことは坂本氏らOBの方々が高齢であることを考えると適当でないとの結論に至った。そこで、学院の戦争責任の問題に関しては、改めて『西南学院百年史』(2017年発行予定)にゆだねることになり、これと切り離して早い時期に記念式を行うこととし、12月に「西南学院学徒出陣戦没者追悼記念式」実行委員会が設置された。

委員長には吉田茂生理事長、委員は、伊原幹治(常任理事、中学校・高等学校長、百年史編纂委員)、高良研一(常任理事、事務局長)、大杉晋介(総務部長)、篠田裕俊(学院宗教局・大学宗教部事務室長)、立石肇(総務課長)、坂本剛頼(広報課長)がなり、担当部署は総務課と決まった。

追悼式の実施に当たっては、当初日時は、1943年の学徒出陣から70年目に当たる2013年の5月15日の創立記念日という案があったが、この日では創立記念式を含めると行事全体が長くなり、追悼式中途半端になる恐れがあったので、遠くない別の日ということで、6月1日(土)に決定し具体的な準備に入った。

まず、場所に関してはどこからも異存がなく大学博物館（ドージャー記念館）に決定した。学院の一番古い建物であると同時に、これが中高のチャペルとして長く使用され、戦時中に行われた過去4回の追悼式もここで行われている。また、1階の院長室がかつては天皇の「御真影」を安置する「奉安所」として使われたという経緯もある。ただ、出席予定者の方々が高齢のため、すり減って滑りやすくなった階段の上り下りの際には注意が必要との意見が出された。

次に、当日のプログラムの内容と担当者の検討に入った。特に一番時間を要したのは、誰が式辞を行うかであった。本来であれば学院を代表する立場の院長（宗教局長）が行うべきであるが、パークレー院長とシャフナー宗教局長は共に米国籍のアメリカ人であることから候補から外された。こうして何回かの検討の結果、前院長の寺園喜基先生（学院名誉顧問）に決定された。そもそも、この件は寺園先生が院長の時に持ち込まれた案件で、その下で検討が始まったという事情があった。当時ドイツ滞在の先生にはメールでお願いをした。私（伊原）は聖書朗読と祈禱を担当したが、説教者の話の内容との統一性をもたせるために祈りの文案を何度かやり取りした。寺園先生からも事前に説教案が届けられ、関係者によって検討が行われた。

追悼式参加者は、学院教職員と、他にラグビー部やグリークラブなど当時活動していたクラブのOBや同窓会関係者などとした。また、このような企画が準備されていることを知らない学院教職員に対しては、私が2013年5月号の西南学院月報（No. 741）に「『西南学院学徒出陣戦没者追悼記念式』開催に当たって」と題して、その経緯と趣旨を記した文章を掲載することになった。



学徒出陣戦没者追悼記念式（2013.6.1）



西日本新聞に掲載された追悼記念式（2013年6月2日付西日本新聞）

また、学院外部に対しては、政治的に利用される可能性がある微妙な問題を含んでいることから、これを周知することは避け、当日の取材に関しては西日本新聞に依頼することにした。翌6月2日朝刊には、「西南学院70年を経て」「学徒兵の命に祈り」という見出しで、「西南学院大などを運営する学校法人西南学院（福岡市早良区）は1日、同学院の旧制校を繰り上げ卒業して戦地に赴き、命を落とした若者たちの追悼記念式を開いた」との記事と共に、挨拶する坂本氏の写真入りで掲載された。参加者は約220名で、チャペルでの式典の後、記念写真の撮影を行った後、クロスプラザに場所を移して軽食を交えた懇談が行われた。

今回の追悼式の意義は、坂本氏らにとっては、長い間胸につかえていた先輩戦没者の方々を追悼し、覚える機会が実現したことであり、挨拶からは長い間抱えて来た責任から「やっと」解放されたという安堵感が感じられた。学院にとっては、学院の戦争責任や戦後責任について考える契機となったことである。これまで、心のどこかにとげのように突き刺さっていたこの問題に決着をつける端緒となったのである。学院の100周年を前に過去を見つめ直すことで、次の100年に向かって踏み出すいい機会になったのではないだろうか。

最後に、私たちは、「学徒出陣」という悲しい出来事を忘れないように心に刻むことが大事であると思った。人間は愚かなので、歴史は繰り返す。必ず繰り返す。だから、忘れないようにする工夫が必要なのである。そのためには、間違いを隠したり、

忘却の彼方に追いやるのではなく、覚え、心に刻むことが必要であると改めて覚えさせられた日となった。

今、1947年5月に施行された日本国憲法を改正しようとの声が出ているが、そのことを含めて、これから私たちはアジアで世界で、どのような立ち位置にありたいとしているのだろうか。さらに、そこにあって「平和を守る」だけでなく、「平和を作り出す」ためにどのような貢献 Impacting the World ができるのかを考えなければならない。それらのことを通して世界から信頼される国になることが必要なのである。西南学院中学校出身の中村哲氏（医師・ベシヤワール会現地代表）が30年にわたるパキスタン・アフガニスタンでの支援活動を評価され、2013年度の第24回福岡アジア文化賞大賞を受賞したが、西南学院がこのような人材をこれからも多く「動員」できる学校になることを願っている。